人生を豊かにする暮らし

元あざみ寮施設長
石原繁野 さん

思い返すと１歳下のいとこや小学校時代の同級生と、子どものころからずっと障害のある人たちと一緒に育ってきました。糸賀一雄先生の姪と中学校で同級生になったことも大きな出会いです。高校卒業後には二人とも保母（当時）さんになりたくて、学生のころから滋賀の近江学園へボランティアをしに行こうと決めていました。私はあざみ寮へボランティアに行くことになります。1956年、寮生さんたちとの出会いです。

就職の年は、ちょうど寮で織物のとりくみをはじめようと計画されていたときでした。「私もみんなと一緒に織物をやりたい」その思いであざみ寮へ就職することにしました。

織物をはじめるにあたり、糸賀先生は民芸運動の第一人者である倉敷の外村吉之介先生を寮にまねきます。寮生さんの姿から織物のしごとについて助言を受け、とりくみをつくっていったのです。織物は、そのものが生活に根付いた文化であり、だれをも受け入れる奥深い力をもっていました。もみじ・あざみにはもう90歳代になる方がいますが、今でも調子の良いときには機（はた）の前に座り、１時間ほど織りしごとをしている姿があります。織物のほかにも、演劇や農園などとりくみの一つひとつに寮生さんの物語があります。

寮では生活に根ざした学びも大切に位置づけてきました。「死」についてみんなで学んだこともあります。ある寮生が病気になり「こわい、こわい」と言って亡くなっていったことがきっかけでした。死を前にした人に、ただ「大丈夫よ、大丈夫」と言うだけではいけない。そこで当時、奈良国立博物館におられた西山厚さんにみんなでお話を聞きに行きました。「死を迎えるときは、自分の一番大切な人が迎えに来てくれる」そんなお話をていねいにしてくださり、後にはみんなでお礼の手紙や感想を送りました。そのことを『仏教発見！』（講談社現代新書）という本に書いておられます。

みんなで死について学んだことで、死を迎えるときにも共通の経験と共通の言葉が生まれました。「大丈夫」の一言にお互いの気持ちがつながっていくのです。そんな学びの経験が大切だったと思います。自分たちの暮らしのなかに学んだことが残っていく、それはきっと生きていく力になりますよね。

みんなと一緒に暮らす、そのことでいろんな出会いがあり私自身の生活も広がっていきました。寮生さんたちと暮らせたから、私もいい人生を送れたなと思っています。　（談）

いしはら　しげの／1937年岡山県生まれ。1957年、あざみ寮に入職。1971年には、インカの織物に触発され一年間ペルーへ留学。2001年まで施設長を務め、退職後ももみじ・あざみのみなさんとの交流を続ける。